日蓮大聖人御書全集

松野殿御消息（まつのどのごしょうそく）

（一劫の事（いっこうのこと））

新版
1982
〜
1985

松野殿御消息（一劫の事）

建治2年（'76）2月17日　55歳　松野六郎左衛門

柑子一籠・種々の物、送り給び候。

法華経第七の巻の薬王品に云わく「衆の星の中に月天子は最もこれ第一なり。この法華経もまたかくのごとく、千万億種の諸の経法の中において、最もこれ照明なり」云々。文の意は、虚空の星はあるいは半里、あるいは一里、あるいは八里、あるいは十六里なり。天の満月輪は八百里にておわします。華厳経六十巻あるいは八十巻・

般若経六百巻・方等経六十巻・涅槃経四十巻三十六巻・大日経・金剛頂経・蘇悉地経・観経・阿弥陀経等の無量無辺の諸経は星のごとし、法華経は月のごとしと説かれて候 経文なり。これは、竜樹菩薩・無著菩薩・天台大師・善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊の金言なり。譬えば、天子の一言のごとし。

また法華経薬王品に云わく「能くこの経典を受持することあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一なり」等云々。文の意は、法華経を持つ人は、

男ならば、いかなる田夫にても候え、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至漢土・日本の国主等にも勝れたり。いかにいわんや、日本国の大臣・公卿・源平の侍・百姓等に勝れたること、申すに及ばず。女人ならば、憍尸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候。

案ずるに、経文のごとく申さんとすれば、おびただしきようなり。人もちいんこともかたし。これを信ぜじと思えば、如来の金言を疑う失は、経文明らかに阿鼻地獄の業と

見えぬ。進退わずらい有り、いかがせん。

この法門を、教主釈尊は四十余年が間は胸の内にかくさせ給う。さりとてはとて、御年七十二と申せしに、南閻浮提の中天竺王舎城の丑寅、耆闍崛山にして説かせ給いき。今、日本国には仏御入滅一千四百余年と申せしに来りぬ。それより今、七百余年なり。先の一千四百余年が間は、日本国の人、国王・大臣乃至万民、一人もこのことを知らず。

今、この法華経わたらせ給えども、あるいは念仏を申し、

あるいは真言にいとまを入れ、禅宗・持斎なんど申し、あるいは法華経を読む人は有りしかども、南無妙法蓮華経と唱うる人は日本国に一人も無し。日蓮、始めて建長五年夏の始めより二十余年が間、ただ一人、当時の人の念仏を申すように唱うれば、人ごとにこれを笑い、結句は、のり、うち、切り、流し、頸をはねんとせらるること、一日二日、一月二月、一年二年ならざれば、こらうべしともおぼえ候わねども、この経の文を見候えば、檀王と申せし王は、千歳が間、阿私仙人に責めつかわれ、身を牀となし給う。不軽菩薩

と申せし僧は、多年が間、悪口・罵詈せられ、刀杖・瓦礫を蒙り、薬王菩薩と申せし菩薩は、千二百年が間身をやき、七万二千歳ひじを焼き給う。これを見はんべるに、いかなる責め有りとも、いかでかさてせき留むべきと思う心に、今まで退転候わず。

しかるに、在家の御身として、皆人にくみ候に、しかもいまだ見参に入り候わぬに、いかにと思しめして御信用あるやらん。これひとえに過去の宿植なるべし。来生に必ず仏に成らせ給うべき期の来ってもよおすこころなる

べし。その上、経文には、鬼神の身に入る者はこの経を信ぜず、釈迦仏の御魂の入りかわれる人はこの経を信ずと見えて候えば、水に月の影の入りぬれば水の清むがごとく、御心の水に教主釈尊の月の影の入り給うかとたのもしく覚え候。

法華経の第四の法師品に云わく「人有って仏道を求めて、一劫の中において、合掌し我が前に在って、無数の偈をもって讃めば、この讃仏に由るが故に、無量の功徳を得ん。持経者を歎美せば、その福はまた彼に過ぎん」等云々。文の

意は、一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の浅智なる法華経の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養せん功徳は勝るべしとの経文なり。一劫と申すは、八万里なんど候わん青めの石をやすりをもって無量劫が間するともつきまじきを、梵天三銖の衣と申してきわめてほそくうつくしきあまの羽衣をもって、三年に一度下ってなずるに、なでつくしたるを一劫と申す。この間、無量の財をもって供養しまいらせんよりも、濁世の法華経の行者を供養したらん功徳はまさるべきと申す文

意(こころ)は、一劫(いっこう)が間教主釈尊(あいだきょうしゅしゃくそん)を供養(くよう)し奉(たてまつ)るよりも、末代(まつだい)の浅智(せんち)なる法華経(ほけきょう)の行者(ぎょうじゃ)の上下万人(じょうげばんにん)にあだ怨(あだ)まれて餓死(がし)すべき比丘等(びくとう)を供養(くよう)せん功徳(くどく)は勝(すぐ)るべしとの経文(きょうもん)なり。一劫(いっこう)と申(もう)すは、八万里(はちまんり)なんど候(そうら)わん青(あお)めの石(いし)をやすり鑢をもって無量劫(むりょうこう)が間(あいだ)磨(する)するともつきまじ尽きを、梵天三銖(ぼんてんさんしゅ)の衣(ころも)と申(もう)してきわめてほそ細くうつくしきあまの羽衣(はごろも)をもって、三年(さんねん)に一度(いちどくだ)下ってなずる撫に、なでつくしたる尽を一劫(いっこう)と申(もう)す。この間(あいだ)、無量(むりょう)の財(たから)をもって供養(くよう)しまいらせんよりも、濁世(じょくせ)の法華経(ほけきょう)の行者(ぎょうじゃ)を供養(くよう)したらん功徳(くどく)はまさる勝べきと申(もう)す文(もん)

なり。

このこと信(しん)じがたきことなれども、法華経(ほけきょう)はこれていに体(たい)おびただしくまことしからぬ事(こと)どもあまたはんべり。また数多(かずおお)信(しん)ぜじとおもえば、多宝仏(たほうぶつ)は証明(しょうみょう)を加(くわ)え、教主釈尊(きょうしゅしゃくそん)は正直(しょうじき)の金言(きんげん)となのらせ給(たも)う。諸仏(しょぶつ)は広長舌(こうちょうぜつ)を梵天(ぼんてん)につけ付(つけ)ぬ。父(ちち)のゆずりに母(はは)の状(じょう)をそえて賢王(けんおう)の宣旨(せんじ)を下(くだ)し給(たも)うがごとし。三(みつ)つこれ一同(いちどう)なり。誰(たれ)かこれを疑(うたが)わん。されば、これを疑(うたが)いし人(ひと)、無垢論師(むくろんじ)は舌(した)五(いつ)つに破(わ)れ、嵩法師(すうほっし)は舌(した)裂(さけ)ただれ、三階禅師(さんがいぜんじ)は現身(げんしん)に大蛇(だいじゃ)となる。徳一(とくいち)は舌(した)八(やっ)つにさけ

にき。それのみならず、この法華経ならびに行者を用いずして、身をそんじ、家をうしない、国をほろぼす人々、月支・震旦にその数をしらず。第一には、日天、朝に東に出で給うに、大光明を放ち天眼を開いて南閻浮提を見給うに、法華経の行者あれば心に歓喜し、行者をにくむ国あれば天眼をいからしてその国をにらみ給い、始終用いずして国の人にくめば、その故と無くいくさおこり、他国よりその国を破るべしと見えて候。

昔、徳勝童子と申せしおさなき者は、土の餅を釈迦仏

に供養し奉って阿育大王と生まれて、閻浮提の主と成って、結句は仏になる。今の施主の菓子等をもって法華経を供養しましまします。いかに十羅刹女等も悦び給うらん。ことごとく尽くしがたく候。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

二月十七日　　日蓮　花押

松野殿御返事